

【姫路市立城東小学校】の取組

1 テーマ

夢をもち、自ら学び、高め合う子の育成
-教科指導型日本語指導から、全員が「分かる」授業づくり-

2 テーマ設定の理由

本校の児童は、誰とでも親しみやすく、全体的に自己肯定感も高い傾向にある。反面、学力面においては、表現力に課題があり、論理的に考えたり記述したりする面に苦手意識のある児童が多い傾向にある。

そこで、授業のUDの視点を取り入れ、誰もが主体的・対話的な学びの中で、自分の考えを言語化したり構造化したりできる授業づくりを設計することで、一人一人の表現力が高まり、実感の伴った深い学びができると考え、本テーマを設定した。

研修の主題は目指す児童像、副題を研修の授業改善の方策として設定し、児童の学力向上に取り組んだ。

3 研究経過

(1) 1年次(平成29年度)の取組

①副主題

主体的・対話的で深い学びの授業の創造

②「城東学びタイム」の設定

児童が主体的に学ぶ態度を身に付ける方法の一つとして、3学年以上に「城東学びタイム」という学習時間を週1時間設けた。この時間は、児童の興味・関心、課題に応じて学習内容を自ら選択・決定し、追究していく。

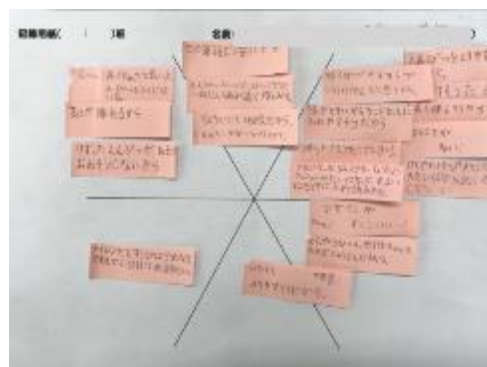
例えば、「3年で学習したかまぼこづくりをさらに調べたい」という児童は、図書室等で調べ学習を行う。また、「今学習している算数の問題が難しい」「もっと漢字を覚えたい」という児童は、基礎学力定着のために、この時間を利用して習得できるようにした。

③思考ツールを活用した授業

NPO学習創造フォーラムFiLC理事の三宅貴久子氏を講師として招聘し、思考ツールを活用した授業改善を教えていただいた。思考ツールは、目には見えない「考え」を言語化・構造化し、見える化することができる。汎用性が高く、授業でも繰り返し使い活用度を増すことで、表現力を培うことが可能となった。



城東学びタイムでの取り組み



シンキングツールの活用

(2) 2年次(平成30年度)の取組

①副主題

「授業のユニバーサルデザインを視点にした、一人一人を大切にする授業づくり」



授業のユニバーサルデザイン研究会 <http://www.kyoo-npo.jp/dokugai/uradai/>

②授業UD研修

全職員が授業UDの理論と具体を理解するために、関西学院初等部副校長の村田辰明氏を招聘した。授業UDとは、授業を焦点化したり視覚化したりすることではなく、目の前の児童の困り感に応じて、授業の展開を工夫していくことだと教えていただいた。

③学習指導案の工夫

授業者は児童のつまずきを予想し、授業UDの視点である、「焦点化」「視覚化」「共有化」などに照らし合わせて授業づくりを行った。学習指導案の展開「指導上の留意点」には、学習活動の詳細な説明だけでなく、「(〇〇につまずく児童)には、～することで～できるようにする。」と個々の学習状況を予想し、具体的な支援を明記するようにした。

(3) 3年次(令和元年度)の取組

①副主題

教科指導型日本語指導から、全員が「分かる」授業づくり

②「日本語の目標」と「ターゲットセンテンス」の設定

「日本語の目標」

- ア 「教科語彙の意味がわかる」タイプ
- イ 「ある表現を習得して、自分の意見や思考過程を、言うこと／書くことができる」タイプ
- ウ 「語彙を増やす」タイプ

「ターゲットセンテンス」

「本時のもっとも重要な学習内容」が分かるために
「思考の手がかりとなる表現」

上記のことを学習指導案に明記することで、外国につながるのある児童だけでなく、全ての児童に学習言語の習得と学力の向上に関連させた授業づくりを行った。授業UDとの融和性も高く、円滑に研究の移行ができた。

③授業の改善

授業づくりについては、大阪教育大学准教授の臼井智美氏に助言をいただいた。

- ・学習の系統性を明確にすること。

- ・児童の習得度状況を明確にすること。
- ・児童のつまずきを明確にすること

今年度、第5学年算数「変わり方」の学習を姫路市帰国・外国人等受入促進事業連絡協議会で公開した。学習の系統性を明らかにするために、学習指導要領の読み込み、4年生以下の教科書の比較をした。

4 3年間の研究を終えて

(1) 成果

これらの取組から、教師は学習に困り感のある児童の実態を意識した授業づくりをするようになり、研究授業後も、児童の達成状況から授業の検討を行うようになった。また、言葉に対する意識が高くなった。

児童は、学習ノートのとめや作文記述方法が「～から～である」や「～と考えるのは、以下の理由があるからだ」と論理的にまとめるようになってきた。授業中の発言にも理由が言えるようになり、「その考えでは成り立たないと思う」など批判的な見方ができる児童も増えた。

(2) 課題

ひな形を与えるなど表現支援をすることで児童の表現力は高まってきたが、表現方法を自由になると、論が通らない表現になる様子がまだ見られる。自らの力で論理的に表現できるようにするために、汎用的に使える力を意識した授業づくりが必要である。

また、1時間や1単元の授業づくりの質を高め、全ての児童が分かる授業づくりを推進する。学習の系統性を明確にした授業改善に努め、児童の学力を向上させていきたい。

5 参考文献

- 1) 澤井陽介(2019)『教師の学び方』東洋館出版
- 2) 小貫悟他(2014)『授業のユニバーサルデザイン入門』東洋館出版
- 3) 臼井智美(2014)『ことばが通じなくても大丈夫！学級担任のための外国人児童生徒サポートマニュアル』明治図書